



西高同窓会報

発行
山梨県立甲府西高
同窓会
印刷
オブリオ印刷
〒甲府市塩部3-13-3

第百十五回 同窓会定期総会開催

第百十五回同窓会定期総会が、令和元年五月十一日、甲府記念日ホテルで開催されました。



傘寿を迎えた高10回生

第一部では、議案七件が承認されました。特に役員改選では、第百十七回定期総会から、甲府西高生が当番幹事になることを見据えた役員構成であるとの説明がありました。次に、新入会員の紹介があり、高十回生の傘寿をお祝いしました。結びに、次期第百十六回定期総会当番の高二十九回生に引継ぎが行われ、閉会となりました。



甲府西高音楽部の合唱



伸太郎LIVE



度までの四年間勤務させていただき、今回で二回目の勤務となります。当時の思い出のひとつに、赴任してはじめてのホームルームでの出来事があります。緊張気味にホームルームを終えたばかりの私に、一人の女生徒が駆け寄り、「先生何か困ったことがあったら、何でも言ってください。」と声をかけてくれました。生徒から先に気遣いの言葉をかけられた私は、この生徒の気配りにとても感心し、感動さえ覚えました。ほかにも、授業中の集中力や学校行事におけるエンジニアイデオロギなど、節度を保ちつつも青春を謳歌する姿が今でもとても印象に残っています。久しぶりに本校で勤務することになりました。

赴任のあいさつにかえて

甲府西高 校長
初鹿野 仁

在であることがわかり、とてもうれしく思っています。ところで、本校では今年度から、国際バカロレア事業が本格的に始まりました。自ら課題を見出し、他者と協働し、主体的に学ぶ姿勢を育てる本事業のアプローチを、学校全体で共有することにより、本校の教育が更に充実するものと確信しております。同窓生の皆様が大いに、今も大事に受け継がれている伝統に、時代のニーズに合った新たな要素を加えていくことで、いつの時代にも求められる甲府西高であり続けられるものと考えております。同窓生の皆様におかれましては、引き続き、ご指導ご鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。

活力資産

甲府西高 前校長 手島 俊樹



先日、東京での会議に出席した折、大学時代の友人と偶然一緒になりました。卒業して数年後に共通の友人の結婚式で会って以来で、再会したのは、三十数年ぶりの再会でしたが、会議の終了後には、とりとめのない会話をしながら、楽しいひと時を過ごしました。不思議なもので、三十年以上会っていないが、ごく自然に会話に花を咲かせることができました。これも、学生時代



甲府西高同窓会に栄あれ

甲府西高同窓会 会長
高15回 坂本 悦子

私が甲府二高の正門をくぐったのは何歳の頃だったのだろうか。自宅から正門の校舎・講堂などの風景は見慣れたものだった。高校への選択の時「二高の前を通って別の学校へ行くことはない」と言われ、二高以外の選択肢はなかった。入学後は木造の校舎を

雑巾がけしたのが思い出し深い。大学卒業と同時に再び甲府二高へ新採用教員として赴任した。恩師の先生方が多くいらっしやる中で恥ずかしい思いな時間を共有した。そして甲府二高から甲府西高と名称を変え、今の新校舎へと移った。南北二棟の建物の真中にピロティというおしゃやかな吹き抜けが、の材材ではないのに同窓会を長を引き受けた。在校生への支援、学校との連携、同窓会の発展、多くの同窓生の皆様のご協力と務めさせてもらった。今思うと甲府西高の節目に居合わせたことは私の喜びである。また多くの生徒の皆さん、同窓生の皆さん、同窓生に彩ってくれた。感謝し、冬になると八ヶ岳おろしがそのピロティを吹き抜け、校庭へと強風を運んだ。その後四十年余り、私はその



同窓会 この二年

令和元年度は邦楽の世界「江戸長唄」の講演ライブでした。唄と三味線の音を堪能したひととき、改めて日本の伝統文化の心地よさを感じました。

甲府西高講演ライブ

高31回 志村 かしわ



講演会
長唄奏者
志村 かしわ
(引退生/西高2期生)

魅力でした。今、大学で教えたり門下生に教えたりの機会を頂き少しもこの自国の文化の良さをお伝えしたいと考え、いきなり一曲を演奏するよりも、曲の中の特に素敵な部分と分りやすいトークでお聴きいただきました。甲府の城下町文化を誇り高く華やかなまま伝えたい。それには皆さまに見て聴いて感じて頂くこと、そして過去ではなく現在進行形の文化として伝統の中に新しい事を創り出していかねばならないこと。精進しても先々に課題が有って年月を忘れております。自由に夢に挑む心が甲府西高で培われていると信じております。

日本の伝統文化はいろいろ有りますが、私は小五の時から長唄三味線のお稽古を始めました。それ迄にピアノやバレエ、スイミングなど当時流行の習い事もやりましたが、和の世界は全く異なるものでとても楽しく、音楽なのに予習よりも復習で修得するところが奥深く知れば知る程おもしろい世界です。日本語の多様な表現に心と感覚を込めて唄う長唄は、劇場音楽のために大きな声で大きな表現が求められその事も大変な魅力となっています。今回母校での講演ライブの機会を頂き少しもこの自国の文化の良さをお伝えしたいと考え、いきなり一曲を演奏するよりも、曲の中の特に素敵な部分と分りやすいトークでお聴きいただきました。甲府の城下町文化を誇り高く華やかなまま伝えたい。それには皆さまに見て聴いて感じて頂くこと、そして過去ではなく現在進行形の文化として伝統の中に新しい事を創り出していかねばならないこと。精進しても先々に課題が有って年月を忘れております。自由に夢に挑む心が甲府西高で培われていると信じております。

東京支部

高校・本部と連携して

東京支部長 高30回 米山 正樹

東京支部は一昨年五月、第五十六回総会を開催し、新支部長を選出し新たなスタートを切りました。これまで甲府高女、甲府二高の先輩方の手により大切に守られてきた東京支部の歴史を、西高世代が受け継ぐこととなりました。総会では、手



東京支部は、五月に明治記念館で恒例の支部新年会を開催しました。現在は、六月十四日に学士会館で開催する第五十七回支部総会の準備を進めています。なお、学士会館を総会会場に決めるにあたっては、同窓生の協力がありました。

支部の特長を生かし、高校や同窓会本部とも連携して取り組んでいきたいと思っております。

第33回前田晃文化賞を受賞して



この度、第三十三回前田晃文化賞受賞にあたり、私の源は、家族であり、高校時代にありと存じます。母校の先生方に一流の絵画、音楽、演劇に触れるチャンスをお頂きました。自国の文化を学び、他国の文化を尊重出来る人間になるため、自分を磨く事を怠らぬよう、ご指導頂きました。心底より感謝致します。今から二十五年前、樋口一葉小説が教科書から削除される事を知りました。居ても立っても居られない衝動に突き動かされ、一葉作品を伝える活動を始めました。しかし原文そのままでは、現代の人々の心に届ける事は難しいと考え、相手役を楽器の生演奏とする「ひとり芝居」に辿りつきました。まだ道なればですが、この賞を励みに今後精進してまいります。

第百十五回 定期総会を終えて

実行委員長 高28回 三上 弥貴子



第百十五回の定期総会は、令和元年五月十一日、甲府記念日ホテルで六百二十八

名のご出席をいただき盛大に開催することができました。「歴史と伝統 素晴らしき未来?さあ?新しい時代へ my life your life」をテーマに掲げました。第一部の総会もスムーズに進行し、傘寿の皆様には八十八名ご出席いただき、薔薇の花を一輪お渡すことができ、傘寿の皆様を代表して有泉志づ子様よりお礼のご挨拶を賜りました。

そのまま校歌斉唱も仲太郎と共にステージ上には先生や実行委員、新入生含め会場の皆様と共に。万歳三唱は、平岡あさ子様にも結ぶことが出来ました。定期総会にあたり、言葉にならない程のご協力を皆様からただけ開催出来ました事を、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

同級生くんには

高20回 山本みや子

私達高二十回生は二度年一度学年同窓会を開いており、今回は母校の歴史を収録したDVDも用意され、初めて見る映像や懐かしい校舎など、見覚えのある風景に、その時々思い出が胸に浮かびました。そこで改めて、受け継がれて来た伝統の重みと、輝き活躍する後輩達の姿に、同じ学舎で高校生活を送る事ができた事を、大きな誇りと喜びとして感ずる事ができました。



ました。人生百年の時代へ古希を迎えた私達も、ますます自分らしく輝いて行く事を約束し散会しました。

各部の活動

事務局

学校及び正副会長、庶務・企画・会計各部の連絡調整や、各種記録の保存管理、本会の業務全般の連絡調整、理事会資料や各種通知の発送等の業務を行っています。

会計部

今年度はコロナ感染防止のため活動に制約があり、費目に多少の変化がありました。又、新しく後輩達の学びの手助けとして、令和二年度から海外語学留学の補助金が設定されました。が、コロナ感染の世界状況の中今年度は中止となりました。又学校へのコロナ対策として補正予算を組み、教育振興費として援助させていただきました。

企画部

昨年度は、甲四十一回生と高二十四回生が辞任なさり、高三十回生が加わり現行五人体制となりました。令和元年九月二十日、高三十一回生の志村かしわ様をお迎えし、長唄の演奏会を開催しました。伝統文化の継承の大切さを実感致しました。令和の時代に遷り変わりましたが、今迄築いてきた伝統に新たな糸を繋いで活動して参りたいと思っております。

庶務部

議事録作成と会報発行が庶務部の二大仕事です。今回の会報は、四面、五面に、「特集」として、同窓会総会誌への寄稿文を掲載します。内容は、同窓会の様子や活動、会員の現在、在校生の活躍が満載です。会報を通して、同窓会への思いが募り、会員相互の親睦に繋がると幸いです。

会員は現在

甲府観光案内所初代ガイド

本科31回 若尾 貞子



「一日が短くて惜しい。」
こう語るのは、甲府市羽黒町にお住まいの若尾貞子さん。

若尾さんは、一昨年八月十二日の山日新聞の「やまな

しの肖像―伝えたい言葉―に紹介された。写真を見つめると百歳とは思えないくらい若々しく、若かりし頃はエネルギーあふれていた。その姿が想像される。

若尾さんは、一九一八年旧満州の大連市生まれ。五歳頃に住まいを甲府に移した。三姉妹の真ん中で耳の治療後、当時の県尋常師範附属小学校に一年間在籍。その後、甲府高女に入学し、

四年間をそこで過ごした。高女時代は、「山海部」の部長として活躍。ここでは大菩薩峠等の登山に親しみ、他にスケート、スキー、乗馬等スポーツの活動を楽しんだ。ここでの出会いが後の人生に多大な影響を与える事になったと言う。

私がこの歳になってこの一文を記すことになったのは、甲府二高で教師をしていた時の教え子の依頼だったからです。

私達高四回生は戦後昭和二十一年甲府高女に入学したのですが、学制改革により現在の六三三四制になり、甲府二高併設中学校という新制中学に三年間在学した後甲府二高に再入学したという学年です。甲府空襲で焼けて校舎はなく、旧六三部隊の兵舎を借りて勉強していました。高校は新校舎が建てられたので、まだ校庭にはバラックの仮住宅が残っている状態でしたが、母校として落ち着くことができた戦後の教育が始まりました。まだ女子の大学進学者は少ない時代でしたが、甲府二高では相当数の進学希望者がいて、それぞ

老いのつぶやき

高4回 三輪 純子



私達高四回生は戦後昭和二十一年甲府高女に入学したのですが、学制改革により現在の六三三四制になり、甲府二高併設中学校という新制中学に三年間在学した後甲府二高に再入学したという学年です。甲府空襲で焼けて校舎はなく、旧六三部隊の兵舎を借りて勉強していました。高校は新校舎が建てられたので、まだ校庭にはバラックの仮住宅が残っている状態でしたが、母校として落ち着くことができた戦後の教育が始まりました。まだ女子の大学進学者は少ない時代でしたが、甲府二高では相当数の進学希望者がいて、それぞ



一行を案内した時は、思い出深かったと語る。商工会議所の方等甲府市の有力者が同行して昇仙峡や富士五湖をバスで巡った。「山梨はいい所ですね。」と小柄だが誠実そうな人柄の吉川氏に「有難うございます。」と一言言葉を返したと言う。今でも忘れ難い思い出は遠縁の洋画家土橋芳次氏の制作した名画「お花唄」の

う心構えが大切で、老いを甘く見ていたと痛感しています。読書も何よりの楽しみで

さて、人生百年時代といわれる昨今です。六十歳で退職して九十歳までとしても三十年間、この長い第二の人生をどう生きるか、人類がかつて経験したことがないだけに人類史の重大な課題として浮上してきています。

一〇五歳でこの世を去った日野原重明先生は「新老人の会」で標語として「愛し愛されること」「創めること」「耐えること」を掲げています。

私は退職後、日本画を創り始めましたが思うにまかせず十年、二十年と悪戦苦闘を重ね、やっと二十年過ぎに望月春江賞展で優秀賞を戴くことができました。この間には病気で入院もしました。病氣も込みで人生とい



モデルになった事だ。氏は洋装を好んだモダンガールの若尾さんと同級生の長田さんをモデルにし、清里の色鮮やかに咲き乱れる花々の中で語り、寛いでいる姿を描いた。この名画はF150号の大作で、長い間甲府駅に飾られ、県内外の人々の目を惹きました。後に当時の桃源美術館収蔵品となったが、描かれたのは昭和十二年で、戦火をくぐり抜けて大切に保管され、今に至っている。若尾さんはこの絵を見ると若いときの自分に会えた様な気がして、大切な宝になっていると言

振り返ると、高女時代の山海部での影響が大きく、登山等を楽しみ切つ掛けを作ってくれた。娘を女手一つで育てても娘には何でもさせたかと思ひ、スキーやスケートの入り口を作った。幸い、娘も孫もスポーツが得意で私以上に活躍の場を広げた。娘のお陰で今の幸せがある。(文責 庶務部)

梅原猛「最澄と空海」「法然の哀しみ」中村元「ブツダ伝」瀬戸内寂聴「釈迦」など。釈迦は入滅の時愛弟子に「アーナンダよ、この世は美しい。人のいのちが甘美なものだ」と仰られたといひます。

絶体の真理が神であり仏であるならば、神や仏に身をゆだね、心安らかに生きたいと思っています。

お箏の道に入つて六十有余年になります。六歳から習い始めました。私の師は、甲府高女を卒業しました中込鳳声(節)先生でした。県下の高等学校に箏を広めた方です。私は甲府第二高等学校時代箏曲部に入学しておりました。その後東京で、箏、三絃の勉強をし、色々幅広い技術を身に付けました。甲府西高に

インドネシアに赴任したのは二〇一三年一月二十九日。日本を発つとき成田空港近辺は一面の雪化粧。極寒の地から一気に南国への移動です。私の任務は味噌を造ること。味噌のことを何も知らない現地作業員とインドネシア語を全く理解していない私が、日本の伝統的調味料をこの地で醸造することが、課せられた使命でした。

初めは戸惑うことばかり。国民の約九〇%がイスラム教徒のこの国では、朝四時頃から町中に大音量でコーランが流れます。彼らはラマダン月にアサ(断食)という修行し、日の出から日の入り迄、食べ物は何も飲み物も一切口にしません。そんな修行が一ヶ月間も続くのです。特筆すべきは時間に割とルーズな彼らも毎日の断食明けには一斉に食事を始めること。その時は完全時間厳守です。車道は車とバイクで溢れかえつ

てなんかくれません。自分の身は自分で守る必要に迫られます。そんな暮らしが三年ほど経過した頃、念願のハラル

がその箏を今でも使用しております。当時の琴糸は絹糸の為よく切れました。車もなく母と姉が自転車の上に乗せ先生の所まで運び修理して頂きました。振り返りますと亡父母に感謝です。一昨年初、山梨県文化奨励賞を県知事より頂きました。まだまだ多数の先輩方がいらつしやるにもかかわらず賞を頂き邦楽界の皆様へ感謝しております。現在、個人レッスン、部活動、外国人の指導、高齢者は一人でも多く触れて頂き、又訪問演奏等しております。高齢者ふれあい印象に残りました事は、九十歳の方でした。昔から箏を習っていたかと思うのですが、九

ていすし、歩道は凹凸で歩くのもままならない状況です。バイクが歩道を平気で走り、赤信号でも止ま

ていすし、歩道は凹凸で歩くのもままならない状況です。バイクが歩道を平気で走り、赤信号でも止ま

インドネシアで思うこと

高31回 赤池 浩三



(イスラム教上許されるものという意)味噌が完成しました。試行錯誤を繰り返して出来たのです。これによりイスラム教徒が安心して食べることが出来る味噌を本格的に供給することが可能になりました。ほぼ同じ頃、山梨県庁指導の下、ジャカルタ山梨県人会が発足しました。その初代会長に就任し現在に至ります。会員は甲府西高同窓生の割合が比較的多く、定例懇親会にいつも参加して頂いております。

日本を離れて早七年。海外で暮らすと、日本は素晴らしい国であると再認識出来ます。美しい自然、恵まれた環境、節度ある民意はどれも世界に誇れるものばかり。日本は今後も世界の模範になるべきです。そのためには、個々が日々の精進を怠ることなく、今の一瞬を過ごすことが大事だと思ふ今日この頃です。

幼小より今現在までお箏一筋

幼小より今現在までお箏一筋

高21回 中村 麗子



も、師と一緒に手伝いさせて頂きました。演奏もNHKホールを初めとして、杉並のテイクレコードで収録したことも、家元夫婦と私、三人で招待演奏した事も今は、素晴らしい思い出となっております。箏を始めた時、親戚の祖母の箏を頂き使用しておりました。が、一年位経過した時、父がこの箏が音が悪いため新しい箏を買って下さいとお願いしましたら早速新しい箏が届きました。父亡き後その時の領収証が出て来て今でも大切に保管しています。箏も何面もあるのです

ないふれることが出来大変嬉しいですよ、その会場の箏の前で写真を撮ってほしいと言われました。本人曰わく、遺影にしたいとのこと。現在邦楽が低迷している中、小中高生の皆様が箏に興味を持って下さる姿を見ると大変嬉しく思います。日本古来の楽器に関心をもち、習う生徒さんが一人でも多くなる様、努力して参りたいと思ひます。私の大好きな言葉は「道」です。



「特集」 第116回 同窓会総会誌 寄稿文

最後の二高生

恩師 古屋 義裕先生



突然の異動で着任してみると、春に完成したばかりの四階建ての見たこともないような立派な校舎がそびえていた。そこには、セーラー服の二、三年生と、ブレザー姿の一年生がいた。私は、二高生最後となる二年生の担任になった。全く思いもかけないことであつた。

二高生には他校の女子生徒に無い深刺さがあった。こんな一面もあつて新鮮だった。職員室の先生方の机の上にはいつも花がある。生徒たちが持つてくるのである。お目当ての先生もいるのだが、自分たちの担任の所にだけはないのか、かわいそうという思いから（たぶん）、私の所も途切れることはなかった。

先生と生徒の距離は近かった。その表れの一つが学園祭での先生方の演劇発表である。ペテランの国語の先生が脚本を書き、大勢の先生が放課後何日もかけて、

時には夜食を共にしながら練習をし、舞台装置を作った。当日は喝采を浴びた。思うに当時は先生方にもいろいろな意味で余裕もあつたのだ。

忘れられない思い出を一つ。LHRの時間、散歩に出た。四十八人のセーラー服と早春の荒川の土手をそぞろ歩いた。明るい陽光とさんざめき。今振り返ってみればモノクロの青春映画の一場面のような気がする。

彼女らの卒業式。すすり泣きが聞こえる中、「もう二度とセーラー服を見ることのできないと思うと寂しくて寂しくて」という答辞の一節にはさすがに目頭が熱くなった。

よき時代の、思い出深い、いい教員生活を送らせて頂いたと思う。

二高最後の卒業学年 そしてアメリカへ 高29回 Kitrick 樋口 朋子



変わる空と海の色と景色を眺めながら、遠く故郷の事を思い起こします。私は、二高女子高最後の学年に入學しました。

初めての女子校の世界の一年生、学年の終わりにには、

校舎引越しの為、部活動の物を旧校舎から、新校舎へ歩いて、運びました。その時の寒さの中、夕焼け空に綺麗な山々の景色が目につきました。

私達が二年生になると、新校舎で、男子生徒と新しい制服の女子生徒が入学してきました。私達二年生、三年生は、校舎の上の階から、選抜制度で入學してきた一年生を、なんとなく眩しい感じで、眺めていたような感じがします。私達は、女子校から共学への変動を肌で感じた学年だったと思います。そして卒業時には、セーラー服最後の二高としての卒業式と、メディアの取材軍が多々来ていたのが



印象的でした。アメリカの大学で勉強したいと思っていた私は、一度は親の希望で日本の短大へ進学した後も、親を説得してアメリカの大学を受験したので、高校からの成績証明書、推薦状等を頂いた時には、高校の名前は、甲府西高に、変わっていました。

アメリカの東部、中西部、そしてカリフォルニアも、サンタ・バーバラ、シリコンバレーを経て、今、西海岸最南部のサンディエゴに住んでいます。同じ国でも、気候も、文化も景色も全然違うそれぞれの地で、学生として、社会人として、また三児の母親として、いろいろな人々に出会い、その環境と変化に順応していく力は、二高から西高への変

動の時代に、ついたような気もしています。

今は、この温暖な気候、海とキャニオン、自然に恵まれたサンディエゴで、和の物に惹かれて、お茶を習い始めたり、着物会、フラダンス、ハイキング等、そして、旅行が好きなので、日本へ里帰りの他に、毎年ヨーロッパのあちこちで、新しい発見を楽しんでいます。

Life is too short, enjoy!

はるかなる道

甲女39回 佐藤 八重子



おん宮のいでます道を清めんと

甲斐の野山に降れる五月雨

この頃、物忘れがひどいのに甲府高女四年生の時の日記に書いたこの短歌が、今も記憶に残っています。もう八十年近い昔なのに。

昭和十七年五月、梨本宮様が甲府高女に御来臨になる日の朝、庭に出たら小雨がばらついていました。もつともすぐに止みましたが。

時は戦時下。宮様御来臨は学校としてはこの上ない名誉です。一ヶ月前から全校生競争で教室の横の廊下

様御来臨後も校長室に掛けられていました。

それから幾星霜、家業と家事にいそがしく絵とは無縁の日々でしたが、子育ても一段落した頃、母に誘われ、母より四年下級生だった叔母も誘い、絵の会に入

その私ももう九十三歳、それでも庭の花を見ると絵心をそそられるのは、西美会展という発表の場があるからでしょう。地区の高齢者作品展で優秀賞を頂いたのも、西美会会員として絵筆に親しんでいたからだと思えます。

敬老の日に孫が三十五色の岩絵具をプレゼントしてくれました。さあ、頑張ってください。

こんな年寄りですが西美会の皆様方、よろしくお願



三人の絵を当時の展覽会場だった県民会館地下室に、主人に車で運んでもらったものです。母、叔母が逝き、私もしばらく会に御無沙汰して御りましたが、又入れて頂きました。

高校時代から皆様のおかげで

高31回 甲府共立病院 眼科 加茂 純子



十五歳の夢は、古代エジプトの考古学者のお嫁さんになることだった。高一年の担任の故中山昭太郎先生より、「考古学では食っていけぬ。技術をもってエジプトへ行け。」と言われた。父で九代の医家の家系で、三人姉妹の長女だったが、継がなくてよいと言われたが、妹直子（幼稚園から大学まで一緒）の担任だった進路指導の故・山本克英先生が、英語ができるなら数学もできると、高三年

の夏に特訓してくださいました。浪人はなし、国立のみという父の言葉に、四面楚歌の面持ちで受験した。共通一次の朝は大雪で、早く出たら一時間も早くついてしまいが、大手の故・窪田良雄先生（四歳から習ったバイオリンの先生）宅によらせていただいた。「本番で実力を発揮するには手足を温めること。」と、ストーブで手を、お茶で体を温めてください、出るときに足を入れてブーツが温かく超感激で、百二十パーセントの力が発揮できた。浜松医大では妹と一年先輩の磯崎泰介さんとオーケストラを創設した故・矢島文夫先生（古代オリエント学者）に無償でヒエログリフを教えていた



中央、太河君 その向かって右が筆者

き、エジプトへはアルバイトした資金で旅行したがひどい下痢で、やはり日本に働くことにした。

山梨大学眼科の故・塚原重雄教授下で研修、大阪の西眼科をへて、スコットランドに夫について留学した。三十八の時に夫がなくなり、両親の助けもあったが、当時二歳だった息子を育てるのにも医師になつていて、本当に良かったと思つた。エジンバラ大学（今年九十四歳）の励ましで、論文を書くようになり、山梨県視覚障害者を考える会をつくり、田辺直彦先生と年三回県立図書館で講演会を続けている。（第十九回は視覚障害と音楽の講演会では同級の長唄の志村かしわさんも講師としておよびました）視覚喪失しても自立した生活ができるよう、助けていきたい。

パイオリンは山梨に帰ってから山梨大学管弦楽団OB会や「たまほ弦楽アンサンブル」に混ぜていただいている。同級のオーボエの長田浩一さんや東條正人さんのご子息・パイオリニス・ト大河くんとの共演の機会もあった。毎年春分の日にKingswell hallで演奏会をしている。残りの人生は今まで受けた（ここには書ききれない）恩をできる限り返していきたい。

今再びふるさとへ

高39回 丹波山村長 岡部 岳志



山梨県

私の出身地は、山梨県の東北部で東京都の県境にある丹波山村です。丹波山村には、県内に出る公共交通機関がなかったことから中学卒業と同時に親元を離れた。入学当初は友達もなく、寮には二歳年上の兄、村の先輩や同級生が数名おりましたが、親元を離れた寂しさや不安から何度も枕を濡らしたことを思い出します。部活動は、一年の時は、硬式テニス部に入部しましたが、

二年、三年では、ラグビー部に所属し、試合にも出場しました。学校や寮生活など、高校生活の中で学んだ様々なことや部活動での経験、同じ時間を共に過ごした友人は一生の宝物となっています。卒業後、旅行関係の専門学校で学び、都内の旅行関係の会社に就職しましたが、二十五歳で丹波山村に戻り、地元の女性と結婚、婿入りし、坂本姓から岡部姓になりました。

その後、二人の娘を授かり丹波山村で生活をしておりましたが、娘が都立高校への入学を希望したため都内に居住しておりました。その間も、丹波山村への愛着は断ち切りがたく、猟友会、伝統芸能、漁業組合などをとおして交流を続けておりました。

そのような中、現職の村長が急逝し、私に就任依頼が参りました。丹波山村は、関東で一番小さな人口の村で、人口減少のみならず、少子高齢化、基幹産業の衰退等、中山間地特有の課題に直面しておりますが、前村長が未来のために蒔いた様々な種が芽を出し、育ち始めたことを感じていたことから、それを引き継ぐ決心をし、令和元年六月に村長に就任しました。

今後は、丹波山村の新庁舎建設や空洞化した村内の再整備をはじめ、観光立村としての施策を展開しようと考えております。丹波山村は自然豊かで良質の温泉もありますので、同窓会会員の皆様におかれましては、是非お越しいただければ幸いです。

西高での経験に感謝!

高68回 伊藤 奏絵



私は二〇一六年に西高を卒業し、現在は愛知県立大学中国学科で中国語を勉強しています。こうして大学で自分の好きな勉強ができるのは、西高の先生方のおかげです。

一、放課後の個別指導塾
高校時代の私は、勉強ができる方ではなく授業を聞いてもわからないことばかりでした。そのため、放課後の個別指導塾に通っていました。先生方は、わからないところを丁寧に教えてくださり、勉強の楽しさを知ることができました。

二、部活動
剣道部と文芸部に所属し、勉強と同じくらい熱を入れていました。剣道部では今村先生、前田先生の指導の下、毎日稽古に打ち込みました。文芸部では顧問の奥田先生に、さまざまな大会に引率していただきました。

三、大学での活動
京都外国語大学主催第三十一回全日本中国語弁論大会、日中友好協会主催第三十七回全日本中国語スピーチコンテスト愛知県大会において最優秀賞をいただきました。

め放課後は毎日のように職員室に行き質問をしていました。時には関わりのない他学年の先生に指導してもらったこともありました。一人の生徒に対しここまで熱心に指導していただけたのは西高だけだと思います。特に当時の学年主任だった廣瀬先生には、非常に感謝しています。二年生から大合格まで英語の指導をしていただき、苦手を英語を克服し外国語学部合格することができました。

三、大学での活動
京都外国語大学主催第三十一回全日本中国語弁論大会、日中友好協会主催第三十七回全日本中国語スピーチコンテスト愛知県大会において最優秀賞をいただきました。

下、毎日稽古に打ち込みました。文芸部では顧問の奥田先生に、さまざまな大会に引率していただきました。國學院大学で行なわれた関東地区高校生文芸大会で私の書いた詩が谷川俊太郎さんに好評をいただいたこと、文学館で開催された詩の大会で、レミオロメンの藤巻亮太さんに私の作品を選んでいただき表彰されたことなど、今でも忘れられない思い出ばかりです。

三、大学での活動
京都外国語大学主催第三十一回全日本中国語弁論大会、日中友好協会主催第三十七回全日本中国語スピーチコンテスト愛知県大会において最優秀賞をいただきました。

谢谢 再见 你好



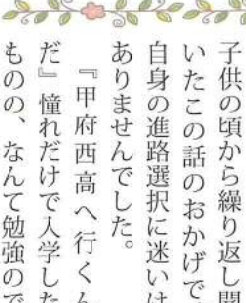
回顧と感謝

高51回 株式会社ZEALOT 代表取締役 常盤 臣



ミレニアムが差し迫った一九九九年三月に私は西高を卒業しました。あれから二十年余りの時が過ぎ、二〇一九年八月に高五十一回生同級会が開催されました。多くの参加者、先生方を見るにつけ、当時の記憶が鮮明に蘇ってきました。卒業以来、このような人数で集まることがなかったため、いくらかの緊張と、たくさんの懐かしさで心がいっぱいになりました。また、奇しくも山梨日日新聞の「元気甲州人」というコーナーに取り上げていただいて寄稿したこともあり、二〇一九年は私にとって回顧の年となりました。

私は、西高卒業後にコンピュータの専門学校へ進学しました。当時Windows98が一般に普及し始めた時期です。将来コンピュータを使った仕事を



二、三年では、ラグビー部に所属し、試合にも出場しました。学校や寮生活など、高校生活の中で学んだ様々なことや部活動での経験、同じ時間を共に過ごした友人は一生の宝物となっています。卒業後、旅行関係の専門学校で学び、都内の旅行関係の会社に就職しましたが、二十五歳で丹波山村に戻り、地元の女性と結婚、婿入りし、坂本姓から岡部姓になりました。

その後、二人の娘を授かり丹波山村で生活をしておりましたが、娘が都立高校への入学を希望したため都内に居住しておりました。その間も、丹波山村への愛着は断ち切りがたく、猟友会、伝統芸能、漁業組合などをとおして交流を続けておりました。

そのような中、現職の村長が急逝し、私に就任依頼が参りました。丹波山村は、関東で一番小さな人口の村で、人口減少のみならず、少子高齢化、基幹産業の衰退等、中山間地特有の課題に直面しておりますが、前村長が未来のために蒔いた様々な種が芽を出し、育ち始めたことを感じていたことから、それを引き継ぐ決心をし、令和元年六月に村長に就任しました。

今後は、丹波山村の新庁舎建設や空洞化した村内の再整備をはじめ、観光立村としての施策を展開しようと考えております。丹波山村は自然豊かで良質の温泉もありますので、同窓会会員の皆様におかれましては、是非お越しいただければ幸いです。

したいと、両親に頼んで専門学校に行かせてもらったのでした。専門学校卒業後は地元ソフトウエア開発企業へ就職、数年お世話になりました。その後はフリーランスのエンジニアを経て、二〇〇八年に東京で起業しました。現在は二十数名の社員とともに、現役でプログラマーの業務もこなす日々です。

近況を書き連ねてみると、順風に見えるかもしれせん。しかし、実は西高の生徒だったとき、特に一年生から二年生にかけては担任の伊藤哲也先生に多大な心配と迷惑をかけてしまいました。恥ずかしながら、当時は素行が良くなく、たびたび問題を起していました。そんな私を卒業まで導いてくださった先生方には感謝の念に堪えません。二十年の時が経ち、同級会に

輝く卒業生の一員に

高69回 中田 玲奈



「私は甲府二高卒業生よ!」という祖母の顔はいつも誇らしげです。「第二次世界大戦から約五年後の混乱期、教育を受けないこともままならない方も多量で、高校まで通わせてもらえた。甲府二高の卒業生達は皆勉強に対し貪欲で教養に溢れ、卒業後も各方面で活躍している。」子供の頃から繰り返し聞いたこの話のおかげで、自身の進路選択に迷いはありませんでした。「甲府西高へ行くんだ!」憧れだけで入学したものの、なんて勉強ので

きる人が多いのだろう、そして勉強だけではなく楽器演奏であったりスポーツであったり、天は二物を与えていますよね?と言いたい人がなんと多かったことか。正直ついていけず登校拒否になった時期もあり、いつか後悔するかもしれない。しかし、西高を卒業した今ではそれら全てが懐かしく、かけがえのない友人達も得ることの出来た三年間でした。先日、勇気をもって参加

飛躍

生徒会長 篠原 綾花



私は生徒会・硬式テニス部・書道部に所属し、生徒会長・テニス部部长を務めさせていただきました。その中でも、西高の生徒会長を務められたことは私の人生において、とても貴重な経験となりました。

就任してすぐに西高生徒表として、県議会講堂にて高校生議院に参加しました。実際に議員の方がお仕事をされる場所で、高校生としての視点から発言をさせていただきました。初仕事でもあったため、終始緊張していましたが、無事役目を果たせた時、小さな達成感を覚えました。そして今後もがんばっていこうという前向きな気持ちになることもできました。「生徒会長」と聞くと少々華やかなイメージがあると思いま

す。実際に私もそのように思っていました。しかし現実には、全校の先頭に立ち円滑に物事をまとめていくことや、行事の準備などにおいて裏方として全校生徒を支えること、これらの苦勞は想像以上のものがありました。時に、この役職の責任の重さに耐えられない時期もありました。そんな時心の支えとなったのは仲間や先生方、そして家族の存在です。改めて、自分一人では無力だということを学び、周囲の人達の存在の大切さ、ありがたさを実感することができました。また、文章を寄稿することや大勢の前で話す機会も多く経験したことで、様々な場面で堂々とした自分でいられる

ようにもなりました。このように、生徒会長としての経験をを通して、人として大きく成長することができたと思います。私は将来、山梨県で医療従事者として、今まで私を支えてくださった人達のように、今度は私が多くの人を支えていく立場になりたいと考えています。この目標に近づくために、西高で学び身に付けた力を十分に生かしていきたいです。



西高生 大空へ!

俳句と合唱を通して

音楽部 雨宮 知己



高校二年生の秋に「雨宮君俳句で全国大会だよ。」と突然言われ驚いた。授業で詠んだ俳句「オロン」の肩に届くか帰路の坂」が大会で入選し、佐賀県で行われる全国高等学校総合文化祭に出場することになった。

その時の私は、音楽部で部長をしていた。毎日顧問の先生と練習内容を考え、コンクールや三月の定期演奏会への準備で忙しくも充実した毎日だった。その頃にも俳句は詠んでいたが、俳句どころではない程、音楽部に熱中していた。

音楽部は定期演奏会で代わりをする。部活動の引退はもう少し先だが、部長という役割は三月で引退することになる。部長を引退した時に、安堵や達成感、喪失感など様々な感情が込み上げてきた。その時にこの感情を俳句に詠もうと思った。「北窓ひらく合唱部三年目」と詠んだ。後から、大会の課題句の兼題が「校舎」であることを知って、丁度良いと思つてこの句を課題句として提出した。

七月末、ついに大会は行われた。同世代とは思えない技術の高い人に沢山出会うのを強く感じた。自分の力量はまだまだ彼らには及ばない、もっと頑張ろうと思つて閉会式の結果発表を聞いていた。「課題句の一席は山梨県の…」一席は私だ。山梨県のこと、上手な人は沢山いるのにならなくて私だけ。信じられなかった。なぜ私は選ばれたのか。



さわやかな新緑の季節となりました。日頃より西美会の活動に、ご理解ご協力を賜り感謝申し上げます。伝統ある西美会の会長を時田京佳前会長から引き継いで二年目になります。

昨年度は、コロナ禍で総会以降はすべて中止となりました。新型コロナウイルスが、世界中で猛威をふるうとは予想だにしてい

新会長と西美会 高19回 重富 秀美

いませんでした。新体制となつて主な活動は今年度からです。

二月に無事総会を終え、第五十八回西美会展が、県立美術館で七月一日から七日まで開催できる運びとなり安堵しています。前回の秋の研修旅行は

「岡田美術館と箱根散策の旅」でした。岡田美術館はまだ新しく四階建てで、収蔵作品多く、日本画・屏風・陶磁器・ガラスなど、一日ではとても見学できないほどでした。機会があったらまた訪れたい美術館でした。その後東山旧岸邸を拝見して、とらや工房で一休み。



て、会計部でいっしょさせていただき、穏やかな人柄が惚れます。ご冥福をお祈り致します。西美会の先輩方の体験談など貴重なお話を、後の人達に伝えていかねばと思います。先生方、西高生、会員の皆様と絆を深め、また新たな事にも取り組んでいきたいらと考えています。今後ともどうぞよろしくお願ひ致します。

先輩との絆

鳳凰館に
ジュエルステンド®を
高12回 雪江なほみ

文化創造館に私の「ジュエルステンド®」を設置させて頂いてから三十年が経ちました。当時の同窓会長の上たか子さんからの依頼で既製品が入る予定のところに入れてさせて頂いたのです。願つてもないお話に即座に私が考案した「ジュエルステンド®」で校章の鳳凰が舞うデザインにしたいと思ひました。玄石を生かし鳳凰を納めようかと悩んだことが思い出されます。



地場産業の貴石画が一世ふうびした時、お知恵拝借と持ち込まれた天然石が私の創作活動の絵具と変わつてもう半世紀も過ぎてしまいました。その過程の中、太陽によって天然石の

結びが輝く宇宙的ロマンを夢みて試みたのがジュエルステンド®だったのです。ガラス製造が困難な時代にメノイがその役割を果たしていたという文献を目にした大久保氏(明治の元勳の孫)が尋ねて来られ共同して作品づくりをしたことも大でした。井上たか子さんの同期に太宰治の奥様の石原美智子さんが居られ、最近知ったのですが小林多喜二は特高

お知らせ

— 第117回 同窓会定期総会 —

開催日：2022年5月15日(日) ご出席をお待ちしております。

ようこそ 甲府西高同窓会ホームページへ

<https://kofunishikou.com/>

同窓会のことならなんでもわかります。アクセスして下さい。



編集後記

一年前、新型コロナウイルスの流行で、会議を始め、同窓会総会、会報の発行も中止となり、時が止まった。そして一年が過ぎ、いつもの会報に、同窓会総会誌に載せる寄稿文の追加が、急遽決まった。

三密を避けるため、部会も開催できず、各自が担当の紙面を構成、チェックすることとなった。

一年前に思いを馳せ、困惑度は最高レベルに達した。ライン、電話でのやりとりが続き、やっと、印刷に漕ぎ着けた。二十三号は、とても感慨深い会報となった。